

## 酪農学園大学附属動物医療センターに係る外部評価結果

「2021年度附属動物医療センター外部評価実施要領」に基づき、動物医療センター（以下、AMCという。）の外部評価を実施したので、次のとおり評価結果を報告する。

AMCの前身である附属家畜病院は、「産業動物医療に従事する臨床獣医師の養成」を目的として1964（昭和39）年に獣医学教育が始まったことを受け、1968（昭和43）年に開設された。以来、教員や産業動物を含めた教育資材を有効に利用し、先端的な産業動物関連の諸科学を学ぶことで、酪農家を支援する実践的な獣医師の養成を図ってきた。その後、2004（平成16）年に現在の場所に移転・新設され、2016（平成28）年には、「附属動物医療センター」（AMC）に名称が変更された。

AMCは、獣医学及び動物看護学の臨床教育及び学術研究の施設として、動物の診療を行うとともに、地域社会に貢献することを目的とし、建学の精神および教育理念に基づく獣医療を社会に向け幅広く展開するとともに、実践的な教育と研究を推進することを役割としている。このように、AMCの運営方針は、学園の理念に合致したものであると高く評価することができる。

しかしながら、運営組織や運営収支等については、次に指摘するとおり改善の余地がみられる。

AMCは伴侶動物医療部門、生産動物医療部門、診療支援部門、動物看護部門、および管理部門からなり、大学附属動物病院という地域の中核となる総合病院として充実した組織体制を構築しているといえる。病院の運営については、動物医療センター運営委員会が設置され、年に数回開催されて診療業務及びセンターの運営に関する事項等が協議されている。運営委員会委員長は必要に応じてセンター全担当教員によるセンター会議を招集し、医療センターの運営に関する事項について協議し、運営に関わる全教員からの意見を聴取することができるかとされている。しかしながら、センター会議の開催頻度については示されておらず、運営委員会あるいはセンター会議において、診療体制や人事構想、センターの経営について、実務担当者を加えて協議されているのか、また、協議内容が大学本部の運営方針に反映されているのかが不明である。AMCに所属する教員の退職者がここ数年続発していることから、教員が何らかの不満を抱えている可能性が高いと考えられる。センターの全教職員に加えて学生実習の受入れ協力酪農家を対象としたアンケートを定期的実施するなどして現場の意見や不満を拾いあげ、PDCAサイクルを回して改善に取り組む仕組みを構築することが望ましい。

人員体制については、生産動物医療部門では教授5名、助教・助手4名であるのに対して、准教授2名と診療および実習を牽引すべく職階にある准

教授が少ない。一方、伴侶動物医療部門においては、准教授4名、助教・助手4名であるのに対して教授が2名と少なく、授業負担が准教授にかなり負担になっていることが予想される。また、病院獣医師に5名の欠員が生じており、円滑な診療業務の遂行に支障を来していることが危惧される。酪農学園大学の看板診療科であった眼科の教員不在や兼務の診療科が複数認められるなど、人員体制は不十分である。一方で、診療支援部門は総勢31名と充実している。動物看護部門は伴侶動物の動物看護師が7名と病院獣医師の定員16名（現在6名）より少なく、さらなる増員が必要と思われる。こうした人員不足の原因を探求して、その対応策を協議するとともに、職階のバランスに配慮した人事を計画的に運用するなど、適切な人員体制の構築に尽力されたい。

運営収支については、学園の規則に従い予算管理及び執行を行っているとのことだが、AMCとして独立した予算管理・執行の実態が見えず、現場の成果に見合う予算管理・執行となっているのか判断できない。当該年度の診療収入から次年度の予算規模が決定されるような仕組みがあれば、高額医療機器や更新機器の導入計画が立てやすくなり、教員の診療に対する意欲の向上にもつながることから、現行の予算管理・執行についてセンター教員に丁寧の説明するとともに、センター教職員の声を反映させた予算管理・執行に取り組む姿勢が求められる。

収支状況については、過去5年のうち3年が減価償却費を除き黒字となっていることを根拠に、ほぼ適切と自己評価しているが、こうした状況下では計画的な設備更新が困難であり、事実、項目3-4にあるように医療機器の更新に支障を来していることから、収支状況の見直し・検討が必要と思われる。また、運営状況を開示するなど、運営状況をチェックするシステムの構築についても検討することが望まれる。

以上、総評としてAMCの運営組織ならびに運営収支について意見を述べさせていただきました。なお、自己点検・評価報告書に記載のあった各評価項目に対する外部評価委員会の評価を別紙（項目別評価結果）のとおりに取りまとめたので、今後の業務推進にあたって参考にさせていただきたい。

## 項目別評価結果

## 【項目 1】 運営方針

## 【1-1】 運営方針

外部評価 4 適切 (自己評価 4 適切)

酪農学園大学附属動物医療センター規程第1条(目的)では、「獣医学及び動物看護学の臨床教育及び学術研究の施設として、動物の診療を行うとともに、地域社会に貢献することを目的とする」とあり、大学学則第1条に示される建学の精神、およびディプロマ・ポリシーに示される教育理念に基づく獣医学群両学類の目的を具現化する最新の臨床教育環境を提供しており、学園の理念に合致した運営方針となっている。

## 【項目 2】 運営組織

## 【2-1】 組織体制

外部評価 3 ほぼ適切 (自己評価 4 適切)

AMC は伴侶動物医療部門、生産動物医療部門、診療支援部門、動物看護部門、および管理部門からなり、大学附属動物病院という地域の中核となる総合病院として充実した組織体制を構築しているといえる。病院の運営については、動物医療センター運営委員会が設置され、年に数回開催されて診療業務及びセンターの運営に関する事項等が協議されている。運営委員会委員長は必要に応じてセンター全担当教員によるセンター会議を招集し、医療センターの運営に関する事項について協議し、運営に関わる全教員からの意見を聴取することができるとされている。しかしながら、センター会議の開催頻度については示されておらず、運営委員会あるいはセンター会議において、診療体制や人事構想、センターの経営について、実務担当者を加えて協議されているのか、また、協議内容が大学本部の運営方針に反映されているのかが不明である。AMC に所属する教員の退職者がここ数年続発していることから、教員が何らかの不満を抱えている可能性が高いと考えられる。センターの全教職員に加えて学生実習の受入れ協力酪農家を対象としたアンケートを定期的実施するなどして現場の意見や不満を拾いあげ、PDCA サイクルを回して改善に取り組む仕組みを構築することが望ましい。

## 【2-2】 人員体制

外部評価 2 やや不適切 (自己評価 2 やや不適切)

生産動物医療部門では教授 5 名、助教・助手 4 名であるのに対して、准教授 2 名と診療および実習を牽引すべく職階にある准教授が少ない。一方、伴侶動物医療部門においては、准教授 4 名、助教・助手 4 名であるのに対して教授が 2 名と少なく、授業負担が准教授にかなり負担になっていることが予想される。また、病院獣医師に 5 名の欠員が生じており、円滑な診療業務の遂行に支障を来していることが危惧される。酪農学園大学の看板診療科であった眼科の教員不在や兼務の診療科が複数認められるなど、人員体制は不十分である。一方で、診療支援部門は総勢 31 名と充実している。動物看護部門は伴侶動物の動物看護師が 7 名と病院獣医師の定員 16 名（現在 6 名）より少なく、さらなる増員が必要と思われる。こうした人員不足の原因を探求して、その対応策を協議するとともに、職階のバランスに配慮した人事を計画的に運用するなど、適切な人員体制の構築に尽力されたい。

### 【項目 3】運営内容

#### 【3-1】施設規模 外部評価 3 ほぼ適切（自己評価 3 ほぼ適切）

2004 年に落成した動物医療センター本館は 2016 年に改修され、1 階の伴侶動物医療エリアには 8 つの診察室と広い処置室、放射線治療室、隔離入院室、画像読影室等を配置、生産動物医療エリアには、牛診察室、牛手術室、馬麻酔導入覚醒室、馬手術室、簡易検査室等を配置している。2 階には、伴侶動物医療部門の集中治療室や 4 つの手術室、入院室、研修医室、宿直室がある。また授業や講演会、生涯学習の場としても活用可能な大・小会議室が設置されている。さらに、開放的なサロンは学生と教員が休憩やディスカッションを行える場として利用されている。本館と渡り廊下で連結した臨床獣医学教育研究棟は 2016 年に落成し、1 階には 2 つの超音波検査室と内視鏡検査室、臨床検査室、CT 検査室、MRI 検査室、X 線検査室の各検査室の他、画像手術室やハビリテーション室、生体試料分析室が配置されている。2 階には、生産動物医療部門の生理・生化学検査室、遺伝子検査室、細胞診検査室、胚操作室および、伴侶動物医療部門の RNA 室、生体分子解析室、細胞培養室の他、大学院生室・研究生室や教員室が配置されている。以上のことから診療及び教育研究の実施に十分な施設規模となっていると言える。加えて、多目的トイレの設置や廊下・階段への手すりの設置など身障者対応も行っている。臨床獣医学教育研究等の増築により、獣医学類 5 年生（約 140 名）が対象のクリニカルローテーションや vetOSCE 試験対応が可能となった。一方で、教員室・講義室・会議室・書庫・消耗品倉庫が不足していることから、施設規模としてはほぼ適切と判断した。

【3-2】施設管理 外部評価4 適切 (自己評価4 適切)

施設課・外部委託業者と連携し適切に管理していると評価できる。また、施設内各所に手指消毒液や体温計を設置するなど、新型コロナウイルス感染症対策も徹底している。

【3-3】診療頭数 外部評価4 適切 (自己評価3 ほぼ適切)

2020年度は新型コロナウイルス感染症の影響で診療頭数が前年度よりも減少しているものの、伴侶動物と生産動物の双方で十分な診療頭数を確保できている大学附属動物病院として我が国屈指の存在であり、高く評価できる。

【3-4】医療機器 外部評価3 ほぼ適切 (自己評価3 ほぼ適切)

診療に必要な医療機器は揃っていると判断されるが、耐用年数を経過している機器または今年度耐用年数を迎える機器が合わせて約6割に達しており、機器の計画的な更新が望まれる。

【3-5】医薬品管理 外部評価4 適切 (自己評価4 適切)

薬剤部に薬剤師資格を有する専任職員2名が配置され、医薬品の日常的な在庫確認・発注、年度末の棚卸を実施し、法令で取扱が規制される医薬品については専用の保管庫で厳重に管理されていることから、医薬品管理については適切であると判断される。

【項目4】運営収支

【4-1】予算管理・執行 外部評価3 ほぼ適切 (自己評価4 適切)

学園の規則に従い予算管理及び執行を行っているとのことだが、AMCとして独立した予算管理・執行の実態が見えず、現場の成果に見合う予算管理・執行となっているのか判断できない。当該年度の診療収入から次年度の予算規模が決定されるような仕組みがあれば、高額医療機器や更新機器の導入計画が立てやすくなり、教員の診療に対する意欲の向上にもつながることから、現行の予算管理・執行についてセンター教員に丁寧に説明するとともに、センター教職員の声を反映させた予算管理・執行に取り組む姿勢が求められる。

【4-2】収支状況 外部評価2 やや不適切 (自己評価3 適切)

過去5年のうち3年が、減価償却費を除き黒字となっていることを根拠に収支状況はほぼ適切とのことであるが、こうした状況下では計画的な設

備更新が困難であり、事実、3-4にあるように医療機器の更新に支障を来していることから、収支状況の見直し・検討が必要と思われる。また、運営状況を開示するなど、運営状況をチェックするシステムの構築についても検討することが望まれる。

## 【項目5】安全管理

### 【5-1】学生の安全 外部評価4 適切 (自己評価4 適切)

附属動物医療センター危機管理マニュアルおよび防疫マニュアルを制定し、ガイダンス等で周知するなど、学生の安全管理は適切に行われている。

### 【5-2】作業者の安全 外部評価4 適切 (自己評価4 適切)

附属動物医療センター危機管理マニュアルおよび防疫マニュアルを制定し、ガイダンス等で周知するなど、作業者の安全管理は適切に行われている。

### 【5-3】防疫管理 外部評価4 適切 (自己評価4 適切)

防疫管理は防疫マニュアルに従って適切に実施されている。

## 【項目6】利活用状況

### 【6-1】教育への活用状況 外部評価4 適切 (自己評価4 適切)

AMCは、獣医学類および獣医保険看護学類1年生の導入教育、獣医保険看護学類3年生の総合臨床実習、循環農学類3年生の家畜衛生学実験における施設見学、獣医学類5、6年生の参加型臨床実習、ならびに獣医学類4年生のVetOSCEなどに活発に利用されており、学園の教育活動に貢献していると判断される。加えて、2020年まではAMC所属教員による卒業教育セミナーを対面で実施しており、コロナ禍の2021年4月からは「麦の会」会員を対象にwebセミナーを開始するなど、卒業教育にも貢献している。

### 【6-2】研究への活用状況 外部評価4 適切 (自己評価4 適切)

AMC所属教員の業績(資料9)をみると、2016~2020年度のAMC所属教員の学術論文の総数は283編あり、総勢26名の1年間の平均論文数は2.2編となり、診療業務に追われて多忙な毎日を経過しているなかで、臨床教員として活発な研究活動を展開しており、研究で得られた成果を然るべき方法で公表していると評価できる。

【6－3】成果の社会還元 **外部評価4 適切**（自己評価4 適切）

AMC セミナー開催状況（資料 10）によると、2016～2020 年度に伴侶動物医療学セミナーを 27 回開催している。また、生産動物医療学においても、計 4 回の江別ミルクレーディースセミナーを開催しており、卒後教育を中心に活発な社会貢献活動を行っているとは評価できる。